

## #16 (抄録@web用)

太陽の塔は女か男か!?コーナー目次

→ <http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/sun-tower.top.htm>

佐倉ジェンダー研究所トップ

→ <http://homepage3.nifty.com/tomorine3908/mermaid.top.htm>

本稿・修士論文の全文も収録の現代書館刊『性同一性障害の社会学』ご案内

→ [http://est-tomorine3908.blog.so-net.ne.jp/auth\\_socio2006](http://est-tomorine3908.blog.so-net.ne.jp/auth_socio2006)

## 社会現象としてのトランスジェンダー

佐倉智美

平成十六(2004)年度 修士論文

大阪大学大学院人間科学研究科コミュニケーション社会学

## はじめに

世の中には厳然として、性別という枠組みが存在するのが現状である。すべての人が、女・男といういずれかの性別を割り振られ、その枠組みのさだめに従うことが要求されている。それは、ある種の合理性を構築してもいるのだが、一方で、さまざまな問題を包含している。各種の性差別などは指摘されて久しいが、さらにつきつめるならば、性別という枠組みが、個々人の自由な選択をさまざまに、生き方の可能性をせばめてしまっている、ということもできるだろう。

そんな中で、性別という枠組みのさだめに異を唱える試みも、いろいろなかたちでおこなわれてきている。とりわけ、個々人に割り振られた性別とは異なる性別での生活を実行する人々は、ときに注目の対象になりつつも、古今東西、存在してきた。こうした人々に対する呼称は、必ずしも統一されていないが、本稿では〈トランスジェンダー〉を総称として採用することにする。

今日の日本では、トランスジェンダーの人々を念頭に、〈性同一性障害〉という言葉も普及しているが、これは本来は疾病名として厳密な使用が求められる医療用語である。両者はカバーする範囲が微妙にズレており、概念としての立脚点もちがう。実際には意味のちがいがよく咀嚼されないままに混用されている——筆者自身、過去には両者をほぼ同義語として用いていた時期もある——という現実もふまえて、これらについては留意したい。

近年は、日本においてもトランスジェンダーに対する関心が高まり、関連書籍も数多く出版されている。当事者に取材したレポートや当事者自身による手記は、その中心となっている。また専門家・研究者による解説や考証に重点を置いたものも少なくない。しかし、そのいずれにおいても、社会学的視点が取り入れられたものは、なかなか見られない。後者にあっては、医学や法律面からのアプローチが主軸で、いわば〈性同一性障害〉という精神疾患を病理現象としてとらえたものになりがちだ。すなわち、社会現象としてトランスジェンダーが取り上げられることは、後手に回ってきた感が強い。

そこで本稿では、社会学的な立場からトランスジェンダーに注目し、学究的な分析・考察に、取り組んでみたい。それは、往々にして困難な状況に置かれがちな当事者に対して、〈疾病の治療〉とは異なる観点からの有用な情報となり、また広くジェンダー研究一般に対しても、なんらかの新しい視点を提供するものになるのではないかと自負している。

ところで、筆者もまたトランスジェンダー（いわゆる男性から女性へ〔MtF〕の）である。本稿を書き進めるうえで、筆者の当事者性があまりにも前面に出すぎると、論文であるべき本稿が、単なる当事者によるエッセイになってしまうのではないかと、という懸念は当然寄せられることと思う。その点は、

筆者として、じゅうぶんに肝に銘じたいところである。しかしながら、筆者自らの、これまでのトランスジェンダーとしての体験・実践は、やはりデータとして貴重でもある。必要に応じて、これらのある種のフィールドワークの成果として活用させていただくことは、ご容赦をお願いしたい。

なお本稿は、いわゆるジェンダー秩序やジェンダー体制、換言すれば性別二元制と異性愛主義に対する脱構築的な立場を基本とすることが必然となる。本稿を読んでみようというだけの興味関心を抱かれた方には、すでに老婆心かもしれないが、読者がこうした視点を筆者と共有していることは、いちおうの前提となっている。“性別は〈男〉と〈女〉”“男は男らしく・女は女らしく”“男女が恋愛を経て結婚することが幸せ”などといったとらわれがクローゼットの奥に残っていないかどうか、今一度、ご確認いただければ幸いである。

ただ、そうは言っても、本稿を書き進めるための言語自体が、ジェンダー秩序やジェンダー体制を前提とした社会のありように立脚している。そのため文章を簡潔にわかりやすくするには、一見すると性別二元制や異性愛主義に則ったような用語法も、せざるをえないという側面がある。男や女という語のすべてに、いちいち「いわゆる」を接頭させるわけにもいかない。そのあたりは、事情をご理解の上、読者において適宜注意を払っていただけるとありがたい。こうした“言語自体のジェンダー構造にからめとられることなく、いかに脱構築的な論旨を進めていくか”という点は、今後の重要な課題であると言えるだろう。

## 社会現象としてのトランスジェンダー 目 次

はじめに

### 第1章 トランスジェンダーの現状

#### 1.1 日本のトランスジェンダー略史

#### 1.2 『30人のカミングアウト』から

1.2.1 分析の前に

1.2.2 結果一覧

1.2.3 結果要約

1.2.4 FtMとMtFに共通する特徴

1.2.5 FtMとMtFで異なる特徴

### 第2章 ジェンダー秩序・ジェンダー体制とトランスジェンダー

#### 2.1 トランジション以前における社会との不調和

#### 2.2 トランジション過程での社会との摩擦

#### 2.3 トランジション進行後の社会との齟齬

#### 2.4 性的指向に属する問題と同性愛との差異点・共通点

### 第3章 トランスジェンダーをめぐる言説と疑問

#### 3.1 「性は多様である」?

3.1.1 性の多様性の理解

3.1.2 多様であるなら性でなくてもよい

#### 3.2 「トランスジェンダーは性同一性障害という病気」?

3.2.1 精神疾患としての性同一性障害

3.2.2 ジェンダー規範がトランスジェンダーを疾病概念に囲い込む

#### 3.3 「トランスジェンダーはまちがった身体で生まれてきた」?

3.3.1 まちがっているのは性別二分の社会規範

3.3.2 女になる「ひと」は誰か

- 3.3.3 セックスもまたジェンダーである
- 3.3.4 女性にオチンチンがあってもよい
- 3.3.5 美容整形と性転換手術の間

### 3.4 「性自認はあらかじめ決まっている」?

- 3.4.1 後天的か先天的か
- 3.4.2 ホルモンバランスと心理状態
- 3.4.3 生物学的決定論もジェンダーに基づく解釈
- 3.4.4 性自認から性他認へ

### 3.5 「戸籍上の性別は、ぜひ変更されなければならない」?

- 3.5.1 特例法は福音とは限らず
- 3.5.2 変更すべきは戸籍ではない
- 3.5.3 変更しなくてもよい社会に

### 3.6 「トランスジェンダーは性別の越境者である」?

- 3.6.1 〈境〉があるから越境もある
- 3.6.2 〈性同一性障害〉は存在しない

## 第4章 トランスジェンダーから見えてくるジェンダー

### 4.1 パスの可否はなぜ重要か

- 4.1.1 パスはトランジションの生命線
- 4.1.2 社会的実践と外見表示
- 4.1.3 〈男〉か〈女〉の外見表示で所属カテゴリーも決まる
- 4.1.4 中性・両性の不可能性
- 4.1.5 外見表示だけが重要になる不条理
- 4.1.6 パスできる相手と、そうでない相手のちがいがい
- 4.1.7 男女別ジェンダーハビトウスのディスコミュニケーション

### 4.2 FtMとMtFはどちらが得か

- 4.2.1 “男カテゴリー所属”による基礎的アドバンテージ
- 4.2.2 「人間＝男観」のパラドックス
- 4.2.3 性別役割分業体制の社会通念
- 4.2.4 夫婦のジェンダー権力関係
- 4.2.5 ホモソーシャルの閉鎖性

### 4.3 〈性同一性障害〉にジェンダーとセクシュアリティの視点を

おわりに——まとめに代えて

#### 5.1 になりたい自分になるということ

5.1.1 メンズリブとトランスジェンダー

5.1.2 女子高生とトランスジェンダー

5.1.3 ブルセラマニアとトランスジェンダー

参考文献リスト

## 第1章 トランスジェンダーの現状

まず最初に、日本におけるトランスジェンダーの現状を整理しておく必要があるだろう。

### 1.1 日本のトランスジェンダー略史

<略>

### 1.2 『30人のカミングアウト』から

#### 1.2.2 結果一覧

<略>

#### 1.2.3 結果要約

<略>

#### 1.2.4 FtMとMtFに共通する特徴

<略>

#### 1.2.5 FtMとMtFで異なる特徴

<略>

## 第2章 ジェンダー秩序・ジェンダー体制とトランスジェンダー

ジェンダーの諸々の規範は、個人個人が自覚的・無自覚的を問わず、心に深く内面化しているのが現実である。しかし、それは単にひとりひとりがジェンダーにとらわれているということにとどまらない。江原由美子がまとめているように、ジェンダーの諸々の規範というものは、社会に組み込まれた秩序であり、社会体制そのものでもある(江原 2001)。そのため、ジェンダー諸規範は、非常に強固にわれわれの生活の中のさまざまな場面に横たわっており、これは個々人の気持ちの持ちようだけで、どうこうできるものではない。

本章では、こうしたジェンダー秩序・ジェンダー体制の視点から、それがトランスジェンダーにどのような影響を及ぼすのかを見てみたい(江原の論考は非常に精緻であり、「ジェンダー秩序」「ジェンダー体制」の語も、原書では細かな検証に基づいたものとなっている。筆者としては、なるだけそれをふまえたいのだが、本稿では、文脈上、かなり包括的に「ジェンダー秩序・ジェンダー体制」と述べる機会が増える結果となったことを、お許しいただきたい)。

### 2.1 トランジション以前における社会との不調和

<略>

### 2.2 トランジション過程での社会との摩擦

<略>

### 2.3 トランジション進行後の社会との齟齬

<略>

### 2.4 性的指向に属する問題と同性愛との差異点・共通点

<略>



## 第3章 トランスジェンダーをめぐる言説と疑問

トランスジェンダーをめぐる言説は、現在さまざまな解釈や主張がなされている。それらは、当事者の権利を訴えるアクティビズム、ジェンダー学の一環としての分析、あるいは医療にかかわる対応など、その立脚点がまず多様である。また、いわゆるジェンダーフリーをめざす方向と一致するものもあれば、逆にバックラッシュの立場と親和的なものもある。

本章では、そうしたトランスジェンダーをめぐる各種言説に対して、ここまで概観した、トランスジェンダーの現状や、現状の起因となるジェンダー秩序・ジェンダー体制のポイントをふまえながら、考察を加えてみたい。

### 3.1 「性は多様である」?

#### 3.1.1 性の多様性の理解

<略>

#### 3.1.2 多様であるなら性でなくてもよい

<略>

### 3.2 「トランスジェンダーは性同一性障害という病気」?

#### 3.2.1 精神疾患としての性同一性障害

<略>

#### 3.2.2 ジェンダー規範がトランスジェンダーを疾病概念に困い込む

<略>

### 3.3 「トランスジェンダーはまちがった身体で生まれてきた」?

### 3.3.1 まちがっているのは性別二分の社会規範

<略>

### 3.3.2 女になる「ひと」は誰か

<略>

### 3.3.3 セックスもまたジェンダーである

<略>

### 3.3.4 女性にオチンチンがあってもよい

<略>

### 3.3.5 美容整形と性転換手術の間

<略>

## 3.4 「性自認はあらかじめ決まっている」?

### 3.4.1 後天的か先天的か

<略>

### 3.4.2 ホルモンバランスと心理状態

<略>

### 3.4.3 生物学的決定論もジェンダーに基づく解釈

<略>

### 3.4.4 性自認から性他認へ

ところで gender identity は、性的自我同一性とも訳すことができる(性自認と微妙にニュアンスが

異なってくるが)。

自我同一性とは、社会の中で他者を参照しながら、自分の位置づけや存在意義を意識する感覚だと言ってよいだろう。その自我同一性に、性にかんする要素もあるとすれば、それは参照する社会に性別があり、他者として〈男〉と〈女〉がいるからである。

すなわち、かくのごとく社会がジェンダー化され、カテゴリーとして性別が存在したりしなければ、そこにはアイデンティティの焦点も当たらない。性別が虚構であるとすれば、gender identity も存在せず、あるのは単に identity だけということになる。

じつは筆者はかねてより、トランスジェンダーは女や男になりたいわけではないと述べてきた。そうではなく、あくまでもこうありたい自分、そうなりたい自分を希求しているだけなのだ。いや、それはむしろトランスジェンダーにかぎらず、すべての人がそうなのではないか。

しかし、なりたい自分になった後の状態が、現行のジェンダー秩序・ジェンダー体制のもとでは、強制的に〈男〉か〈女〉かに分類されてしまうという現実がある(分類不能な状態が許されがたいということさえある)。その分類をおこなうのは、誰かと言えば、それはもちろん、ひとりひとりの生活現場の周囲にいる他者だということになる。ということは、性別とは自認するものではなく、社会の中で他者によって判断されるものなのである。あるいは、その他者の判断を先回りして予測した結果が性の自認だと言えるかもしれない。

ようするに性自認ではなく〈性他認〉なのである。

### 3.5 「戸籍上の性別は、ぜひ変更されなければならない」?

#### 3.5.1 特例法は福音とは限らず

<略>

#### 3.5.2 変更すべきは戸籍ではない

<略>

#### 3.5.3 変更しなくてもよい社会に

<略>

### 3.6 「トランスジェンダーは性別の越境者である」?

#### 3.6.1 〈境〉があるから越境もある

<略>

#### 3.6.2 〈性同一性障害〉は存在しない

もしもそんな社会になれば、トランスジェンダーに、ことさらにそのように名付ける必然性もなくなるだろう。トランスジェンダーという概念自体が成り立たない。当然、〈性同一性障害〉などというものも、存在しないにちがいない。

## 第4章 トランスジェンダーから見えてくるジェンダー

トランスジェンダーについて研究し、考察を加えていくということには、トランスジェンダーが生きやすい社会とはどのようなものかを探るといふ、トランスジェンダー自身にとっての実利が、ひとつ求められているだろう。

その意味では、例えば後述してあるような「FtMとMtFはどちらが得か」というテーマは、その要求に直接は応えるものではない。FtMとMtFは、いわばお互いにないものねだりをしているわけで、普遍的にどちらかが得であるなどと結論づけられるものではない。

しかし、実際にFtMとMtFを、いろいろな側面から比較していくと、そこには、ジェンダーにまつわる社会のさまざまな問題点が、はしなくも浮き彫りになってくることに気づく。そうして、そんな問題点の中に、トランスジェンダーをも生きにくくしている社会構造が見つかるなら、それはトランスジェンダーへの実利として還流してくることもなる。なにより、トランスジェンダーの問題が、じつは社会全体のジェンダー秩序・ジェンダー体制にかかわるイシューであることをつまびらかにできれば、社会問題としての拡がりも出てくる。

本章では、かかる観点から、論考を進めてみたい。

### 4.1 パスの可否はなぜ重要か

#### 4.1.1 パスはトランジションの生命線

<略>

#### 4.1.2 社会的実践と外見表示

<略>

#### 4.1.3 〈男〉か〈女〉の外見表示で所属カテゴリーも決まる

<略>

#### 4.1.4 中性・両性の不可能性

<略>

#### 4.1.5 外見表示だけが重要になる不条理

<略>

#### 4.1.6 パスできる相手と、そうでない相手のちがい

<略>

#### 4.1.7 男女別ジェンダーハビトウスのディスコミュニケーション

<略>

### 4.2 FtMとMtFはどちらが得か

#### 4.2.1 “男カテゴリー所属”による基礎的アドバンテージ

<略>

#### 4.2.2 「人間＝男観」のパラドックス

<略>

#### 4.2.3 性別役割分業体制の社会通念

<略>

#### 4.2.4 夫婦のジェンダー権力関係

<略>

#### 4.2.5 ホモソーシャルの閉鎖性

幼少期のトランスジェンダーが、学校のクラスメートなどからいじめを受ける例は珍しくない。

いじめを受けるのは、やはりMtFが多いものの、FtMも皆無ではないようだ。安藤大将も、小さいころから曲がったことが大嫌いだったせいで、おとなしい男の子がいじめられているのを見過ごせず、格闘の末いじめっ子を撃退したと自伝で述べているが、その際、いじめっ子からは「おとこお

んな！」という罵言を浴びせられている(安藤 2002: 92-3)。

いじめる側は、この「おとこおんな」という言葉を、上記安藤の例のように“女のくせに男のようなやつ”に用いると同時に、主としては“男のくせに女のようなやつ(つまりいじめられる側に多いMtF)”に対して用いる。

言い換えると、トランスジェンダーは、この「おとこおんな」が出現する文脈において、いじめられている。いじめる側は、この「おとこおんな」概念を意識させる対象として、トランスジェンダーをいじめている、ということになる。

ところで、このトランスジェンダーをいじめる側だが、これがなぜか、ほとんどが男の子たちなのである。

いじめる側が男の子たちであるため、このいじめによる辛さはMtFに対してより酷なものとなる。準抛集団となる男の子集団のその中で、いじめる男の子たちと同じ男の子としていじめられるからである。その点、FtMの場合は当座所属する女の子集団の外部からの攻撃にすぎないので、相対的に回避しやすいと言える。

しかし、どうして「おとこおんな」をいじめるのは男の子たちなのであろうか。

考察に移る前に、もうひとつの例を見ておこう。

筆者が以前とある、いわゆる“逆転カップル”、つまり戸籍上の夫のほうがMtFで、同じく妻がFtMの夫婦の、結婚披露パーティに出席したときのことである。夫婦それぞれの友人知人が大勢列席していたのだが、夫側の列席者のほとんどは、夫がトランジションをおこなった後の友人知人で、その多くは同じMtFトランスジェンダーであった。対して妻側の列席者は、学生時代などトランジション以前からの友人知人が中心で、むしろそれはネイティブ女性であった(外見からははかり知れないセクシュアリティについてはわからないものの、夫側のパターンに照応して“FtMトランスジェンダーばかり”でないのは明らかだった)。

これは、FtMにおいては、違和感を覚えながらも、当座所属する女性集団内で、それなりに人間関係を築くことが可能であるのに対し、MtFには、それが困難であることを示している。

これとおそらく同じことを、筆者が職員研修の講師として訪れたある小学校でも、教員から聞く機会があった。なんでも前年度卒業したあるクラスに、たまたま、FtMとおぼしき女子児童と、MtFと推察される男子児童が、ひとりずついたらしい。ふたりは、やはりクラスメートから変わり者扱いされていたものの、FtMのほうは、それなりに女子集団の中で打ち解けていた。しかし、MtFのほうは、男子集団からどうしても浮いてしまい、やはりいじめのようなことも起こった。その状況を救ったのは女子集団で、「○○ちゃんは、(もう女の子と同じだから)こっちへおいで」ということになり、それ以

後は安定して、女の子たちと馴染んでいたという。秋の運動会では、他の女子児童たちとともにチアリーダーとして応援団に参加し、本人は満足していたらしい。

はたしてなぜ、男性集団の中には男らしい男しか存在しえないのに、女性集団は女らしい女以外の者の存在も受け容れることができるのか？

これらの現象を、的確に説明するキーワードは、もはやホモソーシャルしかあるまい。

ホモソーシャルはイブ・K・セジウィックが練り上げた概念(Sedgwick 1985=2001)で、本来はセクシュアリティにかんする考察から出てきたものではある。しかし竹村和子は自著の中で、これがジェンダーの問題を扱う際にも重要なものになることを指摘している(竹村 2000)。竹村による解説も参考にしながら、本稿に有用なポイントを要約してみると、次のようになる。

ホモソーシャルとは、ここでは、強固な「男同士の絆」に支えられた、男性集団のことである。今日の社会では覇権的な地位にあるのは、こうした男性集団である。

男性集団における強固な「男同士の絆」は、そこに内包された男どうしの心情的にも身体的にも性的な結びつきを隠蔽するために、同性愛者というカテゴリーを創作し、本来は「男同士の絆」が持つ同性愛的要素を、否定的なニュアンスでそこに押しつける。同時に、自分たちの異性愛性をアリバイとして確認しつつ、その欲望を実践する対象として、女性というカテゴリーをも周縁に配置する。

こうして、強い結びつきの男性だけの集団の内部と、そこに入らない外部集団が構築される。しかも、社会で覇権的な地位を持つ、こうした男性集団は、公的領域をその集団内部に特権化する。公的領域とは、“女性の社会進出”などと言われるときの“社会”だと考えてよい。しかし、そんなホモソーシャルな公的領域へ進出するには、その成員間で「男同士の絆」を結ぶことが必要となる。そして、「男同士の絆」を結ぶには、男のジェンダーハビトゥスが不可欠となってくるのである(ここまで本稿では、ジェンダーハビトゥスを「その性別らしく振る舞ううえで必要な後天的に修得される知識や技術」のような意味で、やや肯定的なニュアンスに寄った使い方をしてきたが、本来は、それゆえにジェンダー規範の再生産に資する文化的バイアスであり、個々の人間にジェンダー区分を割り振る強制力を持った権力装置でもあるという、否定的側面もふまえるべき概念である)。

したがって、男らしい男として行動できない者はすべて、「男同士の絆」を結ぶことができず、かくしてホモソーシャルな枠内からはみだしてしまうことになる。男らしい男のみを社会成員として認め、そうでない者を排除していく力学がそこにはある。

その心理的な原動力は、女性蔑視と同性愛嫌悪である。「男同士の絆」を維持するには、公的領域として性愛のニュアンスを排しつつける必要があり、そのためには、異性愛の男以外は内部に



いてはならないのである。竹村は、ここから同性愛(やトランスジェンダー)嫌悪と女性差別は同じ軸線上にあると指摘する。そのことを意識的に表現することを期して、竹村は、<sup>性差別</sup>セクシズムと<sup>異性愛主義</sup>ヘテロセクシズムを統合して、〈[ヘテロ]セクシズム〉と表記することを提唱している(竹村 2002)。

つまりホモソーシャルは、性別二元制と異性愛主義に基づいて性差別をおこなう社会構造そのものと言ってもよいだろう。

このホモソーシャルの考え方を、前述した例にあてはめると、すべての謎は解ける。

男の子たちから「おとこおんな」がいじめられるのは、このホモソーシャルな構造上にある。多くのMtFの少年時代がそうである、男の子らしくない男の子には、男のジェンダーハビトゥスを持ちえない、「男同士の絆」における不適格者として、排除しようという力学が典型的に作用するのである。逆にFtMの少女時代に多い、男の子のような女の子は、ホモソーシャルの安定を揺るがしかねない脅威として、予防的に攻撃を受けているのである。

女性集団が、女らしい女以外の者の存在に親和的なのも、そもそも女性集団は“女性集団”ではないからである。性別二元制とはいうものの、このホモソーシャルと公的領域にかかわる文脈では、性別は男と女ではなく、“男らしい男”と“男らしい男以外”である。ホモソーシャル構造においては、男として社会成員に認められている者以外が、すべて男性集団の外部に放逐されているからである。

“女性集団”というのは、そのすべての外部領域にあたることになる。だから“女性集団”内においては、女らしい女も、それ以外の人(FtMでも、MtFでも、同性愛者でも、その他なんでも)も、ともに“内部の側ではない者”どうしとして仲間になりうるのである。

それゆえFtMが本当に男になるのは難しい。閉鎖的な領域へ、入っていかなくてはならないのだから。その意味では、MtFが男でなくなるのは簡単である。なにせ男らしい男として不適格になれば、逸脱者として自動的に、男の領域から追放されるのだ。

これは、女性がカジュアル衣料で男物を選択してもかまわないのは、たとえそうしたとしても男とは認めてもらえないからであるという逆説でもある。反対に、男性が女物の服を着るまでの敷居が高いのは、すなわちそれをするによって直ちに男でない者になってしまうからなのである。

ひとりひとりの意識においても、女性は多様性を認め合うことに柔軟なのに、男性がなかなかそうはいかないのは、それを認めることで自分が“男でなくなってしまう恐怖”にとらわれている部分が大きいのではないだろうか。

### 4.3 〈性同一性障害〉にジェンダーとセクシュアリティの視点を

このようにトランスジェンダーの背後には、社会のジェンダー秩序・ジェンダー体制が複雑にからみあっている。本稿は決してじゅうぶんな内容ではなかったが、ジェンダーの視点でトランスジェンダーを考察する、かつまたトランスジェンダーの立場からジェンダーを分析する、そういう研究のスタンスは、今後も有用と思われる。

そのうえで、今一度確認しておくべきは、トランスジェンダーは、やはり社会的な現象であり、個人の病理のみに還元していくのは、事態を矮小化するとらえ方だということである。〈性同一性障害〉を、社会学的な視点、とりわけジェンダーやセクシュアリティの観点を抜きにして解釈していくのは、問題の真の在りかを隠蔽する危険に満ちていることを、あらためて指摘しておきたい。

## おわりに——まとめに代えて

### 5.1 になりたい自分になるということ

#### 5.1.1 メンズリブとトランスジェンダー

<略>

#### 5.1.2 女子高生とトランスジェンダー

この、になりたい自分になる、ということについて、興味深いエピソードが、森伸之の文章の中にあつた。

森が『女子高制服図鑑』から派生した仕事を通じて知り合った中に、自分が通う学校の実際の制服にどうしても満足できず、思い悩んだ末、自分の理想どおりの制服を、洋服屋さんに頼んで仕立ててもらった女子高生がいたのだという。

もちろん制服といっても、架空の学校の架空の制服であり、あくまでも制服風の私服にすぎない。本当に学校へ毎日着て行けるわけではない。それでもその女子高生は、休日に出かけるときや、塾へ行くときなどに、その〈制服〉を、あたかも実際に通っている学校の制服のごとく、着て街を歩いたのだ。

そのときの気持ちを、この女子高生は、森のインタビューに答えてこう表現している。「はじめて理想の女子高生になった」気分だったと。

森は、このケースのような女子高生を「自主制服女子高生」と呼んでいるが、こうした「自主制服女子高生」は、思いのほかたくさんいるのではないかと推察している。本当に理想の制服を仕立てるところまでいくのはレアケースかもしれないが、それに近いこだわりを持っている女子高生の多さは、森の仕事を通じた実感なのだろう。

森はさらに、こうした自主制服女子高生の行動が理解できない読者のために、覆面パトカーマニアの例を紹介している。覆面パトカーマニアとは、自分のクルマを限りなく覆面パトカーそっくりに改造することに情熱を傾ける人たちである。とはいうものの、覆面パトカーとはそもそも限りなく普通のクルマそっくりな車両のはずである。それにそっくりな改造とは、いったいどのようなものなのだろう!? たしかに一般には理解に悩む行為ではある(森 1996)。

だが、自主制服女子高生にしても覆面パトカーマニアにしても、これらは“になりたい自分になる”

を追求しているだけという解釈も成立する(自分のクルマは自我の延長なので、クルマの改造も“なりたい自分になる”に含めてよいだろう)。「理想の女子高生」になった気がしたという、自主制服女子高生の言葉は、それを端的に表している。彼女の心の中には、なりたい自分としての理想の女子高校生像があり、彼女はそれに近づくべく、創意工夫をもって実践したのである。

このように、一見すると、一般人からは理解不能な行動でも、本人にとっては、真摯な自己実現であるという例は、少なくないのではないか。

そういう意味では、自主制服女子高生(や覆面パトカーマニア)とトランスジェンダーは、同じかもしれない。

### 5.1.3 ブルセラマニアとトランスジェンダー

<略>

## 参考文献リスト

### 文献

- 安藤大将、2002、『スカートをはいた少年』ブックマン社。
- Butler, Judith, 1990, *GENDER TROUBLE: Feminism and Subversion of Identity*, New York & London: Routledge. (= 1999、竹村和子『ジェンダー・トラブル』青土社。)
- 江原由美子、2001、『ジェンダー秩序』勁草書房。
- 橋本秀雄、1998、『男でも女でもない性——インターセックスを生きる』青弓社。
- 池田久美子、1999、『先生のレズビアン宣言——つながるためのカムアウト』かもがわ出版。
- いつき(土肥いつき)、「不完全フルタイムトランスジェンダーとして」Gフロント関西機関誌『ぼこあぼこ』通刊 15(2000 年秋冬): 15-9。
- 森伸之、1996、『制服通りの午後』東京書籍。
- 日本女性会議 2003 おおつ実行委員会、2004、『日本女性会議 2003 おおつ 大会報告書』
- 小倉千加子、2001、『セクシュアリティの心理学』有斐閣。
- 大東貢生、2001、「運動音痴の男の子こそジェンダー・フリーを求めている——『できなくてもいいんだよ』と伝えてあげたい」『女も男も』2001 夏: 18-20。
- 佐倉智美、1999、『性同一性障害はオモシロイ——性別って変えられるんだヨ』現代書館。
- 、2002、『女が少年だったころ——ある性同一性障害者の少年時代』作品社。
- 、2003、『女子高生になれなかった少年——ある性同一性障害者の青春時代』青弓社。
- 、2004、『明るいトランスジェンダー生活』トランスビュー。
- 佐藤万作子、2004、「ルポ・『性同一性障害』に揺れた大熊さん一家」『婦人公論』2004.1.22.: 60-3。
- Sedgwick, Eve Kosofsky, 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia UP. (= 2001、上原早苗・亀澤美由紀『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会。)
- 相馬佐江子、2004、『性同一性障害 30 人のカミングアウト』双葉社。
- 竹村和子、2000、『フェミニズム』岩波書店。
- 、2002、『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店。
- 葛森樹、2000、「人は弱者になら優しくできる？——最近の好意的 GID 言説とジェンダー視点の隠蔽」大阪市女性協会『CREO 2000 年 11 月号』。
- 、2002、「その人なりの性をもつだれもが自由で公平に生きられる社会へ」アエラムック編集部編『ジェンダーがわかる』朝日新聞社、114-7。

————、2003、「性は限りなく実体化した可変概念」花立都世司他編『性を再考する——性の多様性概論』青弓社、  
158-66。

米沢泉美編、2003、『トランスジェンダリズム宣言——性別の自己決定権と多様な性の肯定』社会批評社。

Copyright Tomomi Sakura 2005